【第17回日本言語文化学研究会発表要旨】

制度的場面における相互行為
—日本語ボランティアグループのミーティング—

森下雅子

（1998. 12. 5発表）

1. はじめに

私達が何かについて発話するということは、単に文法的に適格な文を発するということではなく、相互行為という社会的活動に参与するということである。私達は、その社会的活動の場面がどのようなルールで成り立っているのか、どのようなアイデンティティーで参与しているのか、その発話が相互行為の展開上のどの位置にあるのか、ということに合わせて、自分の発話や振る舞いをデザインしている。

制度的な相互行為とは、日常会話と区別される、教室や法廷などの「制度的」文脈で指向される相互行為である。本研究では、「日本語ボランティアグループのミーティング」という制度的場面を取り上げ、ミーティングの参与者が、相互行為の中でどのようにその制度を観察可能にしているかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査の概要

本研究では、調査対象のボランティアグループについて、ミーティングの録画・録音とフィールドワークを行なった。ミーティングの録画・録音は、4/23、5/19、7/21、10/21の計4回で、1回のミーティングの時間は、約2時間である。フィールドワークとして訪れたのは、4/16、5/7、5/14、5/21、5/28、6/11、6/25（ｶﾚｰﾊﾟｰﾃｨｰ）の計7回で、内容は、受付の手伝い、授業の見学、授業のあとの喫茶店での雑談などである。対象のボランティアグループは、ボランティア数22名（男性4、女性18）〔1998年11月現在〕、クラスは入門のAから上級のEまでの5クラスで、週1回夜に授業を行なっている。ミーティングは月一回定期的に行われ、出席者は平均12名である。司会者はリーダーとして選出されたボランティアが務め、必ず市民館の担当者（以下「行政担当者」とする）が1名入ることになっている。

3. 分析

本研究における分析の観点は、①スピーチレベルシフト、②アイデンティティ・カテゴリー、③談話課題管理、④意思決定過程の4つであるが、ここでは①と②のみ取り上げる事とする。すなわち以下の2点について考察する。

(1) スピーチレベルシフトは参与者にとってどのような意味があるのか。
(2) 参与者のアイデンティティ・カテゴリーは相互行為の中でどのように観察可能になるのか。

3.1. スピーチレベルシフト（丁寧体・普通体のシフト）の要因

(1) 発話のアドレス（発話が誰に向けられているか）

スピーチレベルシフトは、発話のアドレスとフレーム、そして顔の挙げ方や非言語行動と連動している。

【事例1】司会者のシフト（クラスの配置替えについての会話）

(1.司会) 《顔を上げ視線を全体に向けて》替えてもいいかなと思うんですけれど。皆さんのご意見を伺って　＜全体・公式＞
(2.女性) こう決めちゃわないで、来週は、今週はCクラス、次はDクラスってこう。
(3.司会) 《視線をF1に向けて》やってもいいけど、それ結構ごちゃごちゃね、もう。＜F1・非公式＞

(2) 親しさ

普通体の使用は親しさと関係している。そして親しさには本当に親しい場合と、司会者としての発言を促すストラテジーとして親しさを演出する場合がある。

【事例2】親しさ（クラス状況報告の場面で）

(4.司会) っと女①さんいかがでしょうか。(6)
(5.女①) べつに。(9)
(6.司会) ないですか、女①さん(2)ない？@@なんか@ない？ (3)
(7.女①) Aクラスは結構4月の受付の時に新しい方が何人か入って見えて… [中略] そのとおりしたいと思っています。(3)宜しいでしょうか？
(8.司会) @@@有難うございました。女②はいい？
(9.女②) つぎ。

(3) 参加のフレーム（ミーティングの参与者に期待される参加の枠組み）

司会者は丁寧体と普通体のシフトにより、今のこの「場」がどういうものであるか、公式な「場」であるか、非公式な「場」であるかという「参加のフレーム」を他の参与者に示している。司会者は自らの裁量で、ミーティングの進行の中で「参加のフレーム」を管理する。そして他の参与者はその違いを無意識のうちに感じ取り、司会者に合わせて「発話の型」を変える。司会者と他の参与者は協力しあいながらミーティングという「場」を作り上げているということがわかる。

【事例 3】

(10.司会)　持ってない？

(11.女①)　持ってない。

(12.司会)　うん。

(13.女②)　ほしい。 (7)

(14.司会)　そしたらじゃ、学習者 1 だけちょっと特別に。《顔を上げ、体を全体に向け、声のトーンを大きくして》

(15.男①)　ええ、今のところ学習者 1 だけ特別にやっております。(4)

3.2.アイデンティティ・カテゴリー

(1) 司会者

司会者は、司会者とボランティアという 2 つのアイデンティティを持っており、ある時はボランティアとして発話を行ない、またある時は司会者として観察可能なように振舞う。司会者の普通体の使用は、ミーティングでみんなが発言しやすいざっくばらんな雰囲気を作り出すためであり、同時に「自分もボランティアの一員である」というアイデンティティを示す意味も持っている。また、発話の量、権力、顔を見られていること、言葉による相槌などにより、「司会者であること」が観察可能になっている。

(2) 行政担当者

行政担当者は「市民館の××」という言葉と、「俺」という言葉をミーティングの中で使用している。「市民館」は、「行政」と「ボランティア」を区別し距離を置く言葉である。「俺」は、親しさを示し、互いの距離を縮める言葉である。「行政担当者」として、このグループは市民館のボランティア教室であることを機会あるごとにボランティアに示しながら、一方で

ボランティアと仲間として親しく付き合いたいという意識が現れている。

【事例 4】
で、この勢いで増えたら、ちょっと例外、例外的っていうかね。選択肢として、期間を区切ってもう 1 部屋とるかっていう手はあるんですよ。もっとも全体的なまとまりがなくなっちゃったり、それこそ、それこそ市民館の日本語教室としては宜しくないんですけれども、ただ一せっかく勉強しに来た人たちが、あのわーわー隣の声でね、俺もこの前ここに座ったら、あの辺でやってる人の声、聞こえないわけですよね。

4. 今後の課題

本研究で取り上げたのは、1 つのグループの事例に過ぎないが、個別性を踏まえた上で、一般的要因の作用を析出するというやり方により、他の事例にも応用可能な知見を生み出すことができたと考えられる。今後は、データはすでに収集済だが本研究で取り上げる事のできなかったボランティアグループにおける相互行為を分析し、本研究との比較を行ないたい。

＜参考文献＞

1. E.C.Cuff&W.W.Sharrock(1985),"Meetings"『Handbook of Discourse Analysis vol3』Academic Press London pp.149-159
2. J.Heritage(1997),"Chap11 Conversation Analysis and Institutional Talk", David Silverman(ed.)『Analyzing Data in Qualitative Research』pp.161-182.
3. Sacks,H.(1964-1972/1992) "Lectures on Conversation" 2 vols. Oxford: Basil Blackwell
4. 足立さゆり(1995)「日本語の会話におけるスピーチレベルシフト」拓殖大学日本語紀要第5号 pp.73-87
5. 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」昭和女子大学『学苑』662号
6. 岡本能里子(1997)「教室談話における文体シフトの指標的機能－丁寧体と普通体の使い分け」日本語学16.3. pp.39-51